

# 難民 REFUGEES

2001年第3号 (通巻122号)

## 難民の 子どもたち

「わたしたちが  
未来だと言われても、  
死んでいくんだったら、  
未来なんてない」



UNHCR

国際連合  
難民高等弁務官  
事務所

# これまでではよかった。しかし、 これからはどうなるのか

1989年の「子どもの権利条約」から10年余りの間に、文字どおり数百万人の、物や希望を失った世界中の少年少女。その中には多数の若い難民が含まれる。成長し成功する機会が

万人の子どもがいまだに病気や栄養失調で苦しめ、傷つき、障害を負い、孤児となっている。エイズは世界中の恵まれない子どもに死をもたらす災いになった。故郷を追われて国内避難民、



苦境をはね返す力は、危険に脅かされている子どもたちにとって、生き残りの秘けつだ。アンゴラのルエナ市革命記念館では避難民の子どもたちが飛行機の残骸を遊び場に使っている。

© S. SALGADO

あるいは難民として暮らしている子どもは約2500万人にのぼる。

UNHCRはこの約半数を支援しているが、国際社会からはしばしば、さらに多くのことをするよう求められている。そのため、子どもに関する計画と、本来の任務には含まれない国内避難民の一部への関与を再検討している最中である。

しかし困ったことに、UNHCRも

与えられた。

危険にさらされていた数え切れないほどの幼児が、簡単な薬や新しい治療法によって救われてきた。年長の男の子は学校に通えるようになり、教育を受ける女の子も増えてきた。戦争や迫害によって故郷を追われた子どもたちには食べ物や住む場所、そして新しい生活を始める機会が与えられた。

子どもの権利条約には、これまでのどの人権に関する条約よりも多くの国が署名した。そして、故郷の村が混雑した難民キャンプにいるかに関係なく、援助が必要な幼児や子ども、若者の保護と支援のための多くの法律やガイドラインを推し進めるのに役立った。

この分野の10年間の成果を再検討する「国連子ども特別総会」が近く開催される予定だが、ここで代表らは現実の暗い側面に争点を当てることになる。

この10年間に、推定200万人の子どもたちがしばしば故意に殺された。さらに数百

他の諸機関と同じく、より少ない予算でより多くのことを行うよう求められているのが現実だ。ところが予算に必要な額の80パーセントの資金しか集まらない。

この10年間に大きな進歩があったにもかかわらず、今度の会議では厳しい現実と今後10年のための難しい決断に向き合うことになる。

●本号は、著名な写真家セバスチャン・サルガドが撮影した力強いフォトエッセーを掲載した。どの子ども心に深い傷を負うような試練の時をくぐり抜けてきた。しかし、一人ひとりの子どもの顔には、苦難や苦痛よりも、むしろ立ち直る力と希望が静かにみなぎっている。

●見開きページのインタビューで、ルドルフ・ス・ルベルス新高等弁務官が自身の構想を語る。「UNHCRはより無駄のない機関となり、主要任務に集中することで、さらに効率的になることが可能だ」





編集者：Ray Wilkinson  
寄稿者：Christoph Hamm, Christina Linner  
Asmita Naik, David Nosworthy

編集アシスタント：Virginia Zekrya  
写真部：Suzy Hopper, Anne Kellner  
デザイン：Vincent Winter Associés  
制作：Françoise Peyroux  
総務：Anne-Marie Le Galliard  
配本・発送：John O'Connor, Frédéric Tissot  
地図：UNHCR - Mapping Unit

日本語版  
翻訳協力：Scott Bunnell, 多田倫子, 川島敏邦,  
前田真理子  
コンテンツ・トランスレーション  
編集・総務：日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、必ずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権表示のあるものの転載・複写は一切できません。また表示のない写真の使用については、下記のUNHCR事務所までお問い合わせください。

本誌の日本語版制作協力：コンテンツ・トランスレーション、英語版および仏語版制作協力：ATAR sa(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ22万6000部。

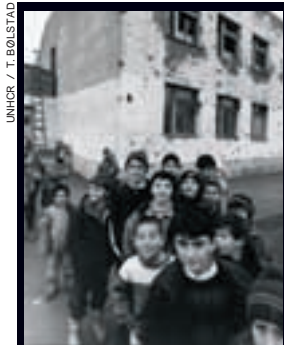
発行：UNHCR日本・韓国地域事務所  
〒150-0001  
東京都渋谷区神宮前5-53-70  
国連大学ビル6階  
TEL 03-3499-2310  
FAX 03-3499-2273  
ホームページ  
<http://www.unhcr.or.jp>  
業務時間：月曜～金曜日  
9:30～17:30  
(昼休み12:30～13:30)  
日本語版発行：2001年10月

表紙：ボスニアの少女(1994年クロアチアのツラニ難民キャンプ)  
裏表紙：国内避難民の少年  
(1996年アフガニスタンのシャマック・キャンプ)  
写真：© S. SALGADO

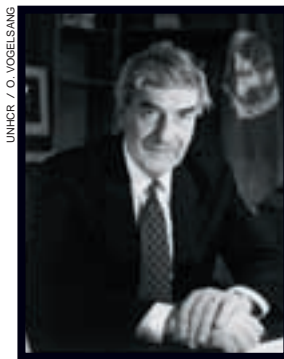
UNHCR ジュネーブ本部  
P.O. Box 2500  
1211 Geneva 2, Switzerland  
[www.unhcr.ch](http://www.unhcr.ch)

# 難民 REFUGEES

2001年第3号(通巻122号)



**4** 過去10年間で状況は  
かなり改善されたが、  
今なお多くの子ども  
たちが避難生活を送って  
いる。教育は子どもたちが  
生きていく助けとなる有力な  
方法だ。チェチェンの子  
どもたちが、戦争の深い傷跡  
が残る校舎で学ぶ。



**16** ルドルフ・ルベル  
ス高等弁務官は、本  
誌とのインタビュー  
で、UNHCRの未来を語る。



**25** 多くの子どもたち  
が、戦争や迫害で  
家を追われた。し  
かしこのタジキスタンの少女  
のように、フォトエッセイに  
ある子どもたちの顔には力が  
あふれ希望に輝いている。

## 2 編集部から

● 難民の子ども 回顧と展望

## 4 特集

● 過去十年間に、何百万もの子どもたちに援助の手が差しのべられたが、まだ多くの子どもたちが悲惨極まりない状況にある。

レイ・ウィルキンソン

## 7 統計

● 統計に見る世界の子どもたち

## 8 教室

● 教育は非常に重要だが、危険は教室の中にさえ存在する。

ポール・ワトソン

## 11 家族と離ればなれになって

● 保護者に同伴されずに先進国にきた子どもたちの運命

ジュディス・クミン

## 15 拘禁

● 捕らわれの身になった子どもたち

エイミー・ドリスコル

## 16 インタビュー

● ルドルフ・ルベルス高等弁務官がUNHCRの将来を語る。

## 19 子ども兵士

● 難民化と子ども兵士との関係

レイチェル・ブレット

## 20 助けを待つ子どもたち

● 心に傷を負った難民の子どもへの救済

ナンダ・ナ・チャンパサク

## 22 ようこそアメリカへ

● アメリカがスーダンの「さまよえる少年たち」を受け入れた。

パノス・モンツイス

## 25 フォト・エッセイ

● 難民の子どもたち

セバスチャン・サルガド





使われなくなった鉄道の引き込み線で寝る子どもたち  
20年以上にもわたるアンゴラ紛争の被害者だ。





# 「友だちのいる教室 銃のない街 地雷のない野原」

だれもが子どもたちを助けたいと思う。それなのに、数多くの子どものいまだに苦しんでいるのはなぜか。

レイ・ウィルキンソン

少女は12歳だった。テーブルの上で裸で踊らされたあと、レイプされた。毎晩、そして何週間も。最後には200マルク（約1万2000円）でボスニアのセルビア人兵士に売り渡された。1992年、ボスニアの町フォチャでは15歳の少女も性的虐待を受けていた。犯人は同じ年の娘を持つ男で、「少女の隠れ場所を教えなければ殺す」と母親を脅した。「母親たちも娘たちも、最後まで残っていた人間としての尊厳すら奪い取られ、女性は、大人も子どもも物のように扱われた」と





難民の子どもたちにとって教育や職業訓練は食料や住居と同じように大切だ、という認識を各人道機関が深めつつある。写真はアフガニスタンで暮らすタジク人の少女たち。

裁判官は語った。そして、12歳の少女9年後の今も行方不明に虐待を加えた犯人を「不幸な子に一切の同情を示さないばかりか性的虐待を加え、間違いなく性的虐待を受けると知りながら、最後には物のように売り渡した」と断罪した。

性的虐待は、とりわけ戦争の混乱と憎悪の中でしばしば起きる。だがこの2件のレイプ事件は、加害者の3人が捕えられ、オランダ・ハーグの国連戦犯法廷にかけられたという点で重要である。法廷では1990年代初めに起きたボスニア紛争中の計画的な数々のおぞましい性犯罪に対する証言が行われた。フローレンス・ムンバ裁判長が、

「ボスニアのセルビア人武装勢力は紛争中に恐怖をあおる方法としてレイプを使った」と断言するに至った。

UNHCRの支援対象となる最大のグループが子どもたちである。

3人の被告 ドラゴリャブ・クナラッチ、ラドミール・コバッチ、ゾラン・ブコビッチ は、集団レイプと奴隷化を恐怖をあおる道具に用いたとして有罪とされ、12年から28年の禁固刑を言い渡された。このような犯罪が

人道に対する罪として認められたのは初めてだった。重大性においてこの犯罪をしのぐのは集団虐殺だけである。

この画期的な判決は、子どもたちの保護をあと押しするようになった一連の包括的な国際協定や地域法、特別計画の中で最も新しく、将来、性的犯罪を犯そうとする者たちに対し「罪は償わなければならない」という警告を発している。

「両親と5人の兄弟姉妹が殺され、死体は犬に食べられたの。妹2人は死体の下に隠れて助かったわ。私はレイプされて男の子ができてしまった。これからは生まれた子と妹2人、弟1人の面倒をみなければならないの

よ」

1994年ルワンダで起きた大量虐殺の生存者ティーンエイジャー。この子は多くのルワンダの子どもたちと同じように生き残った家族の世話をしなければならぬ。

現在、何百万という子どもたちが性的搾取や、他のさまざまな危険にさらされている。その多くが難民や避難民となった子どもだ。世界中で故郷を追われた人々の約半分が子どもである。国連の「難民援助機関」という名前が実体をぼかしてしまいがちだが、UNHCRの支援対象となる2200万人のうち最大のグループが、1000万人の未成年者である。

UNICEF（国連児童基金）などの国連機関とセーブ・ザ・チルドレンのような非政府組織（NGO）が何十年もの間、子どもたちを支援してきたのはまぎれもない事実であり、この十年余りで、この問題への世界の関心や取り組みも急増した。

子どもの権利と子どもに対する国家の義務を詳細に定めた1989年の「子どもの権利条約」は未成年者保護の基盤となり、これまで存在したどの人権に関する条約よりも数多くの国が参加し、アメリカとソマリアを除くすべての国がこの条約を批准している。

1996年、モザンビーク大統領元夫人で現在ネルソン・マンデラ南アフリカ前大統領夫人のグラサ・マシエル氏が、「武力紛争が子どもに及ぼす影響」と題する先駆的かつ衝撃的な報告書を書いた。戦争に巻き込まれた少年少女の苦難についてこれまでにない人権に関する徹底的な調査だった。

各国政府も子どもの問題に注目する

## 子どもたちを取りまく世界

世界中で故郷を追われた人々は約5000万人いる。他国に安全を求めた難民や自国内で避難した人々で、その約半数は子どもである。

UNHCRは、このうち2230万人を援助しているが、そのうち約1000万人が18歳未満の子どもである。

大多数の人々は、戦争によって住む家を追われた。過去10年間に推定で200万人以上の子どもが紛争で殺され、さらに600万人が負傷し、100万人が孤児となった。

この数十年間に、戦争の犠牲者となった戦闘員と一般市民との比率は、100対5から、100対90以上に急上昇した。

87カ国で、子どもたちが6000万個の地雷と一緒に生活し、毎年1万人もの子どもが地雷の被害者となっている。

現在、世界中で子ども兵士が30万人以上いる。多くは10歳以下で、少女兵士の多くが、性的な奴隷にされている。

1989年の「子どもの権利条約」は、児童の保護で最も重要な法的枠組みである。人権に関するどの条約よりも多くの国が加入し、アメリカとソマリアを除くすべての国に批准されている。

昨年、国連総会はこの条約に対して二つの選択議定書を採択した。子どもの売買と児童ポルノの売買の禁止、18歳未満の子どもたちによる戦争行為への参加の禁止に関する議定書である。

UNHCRは、難民や国内避難民となった子どもたちは特別なニーズがあると認めた。そして過去数年、多くの新しい計画を導入し、既存の計画を拡大させ、全体的な活動に組み込もうとしてきた。

先進諸国では（親の同伴の有無とは関係なく）庇護を求める人々全体の半数を子どもが占める。カナダは1996年、難民認定制度を持つ国として初めて、庇護を求める子どもに関して明確なガイドラインを作成した。

西ヨーロッパだけで常に10万人もの保護者のいない子どもがいる。こうした子どもたちが毎年2万人、ヨーロッパ、北米、オセアニアで庇護申請をしている。

1994年～99年の間に、国連は135億ドルの緊急援助資金（大半は子どもが対象）を要請したが、実際に受け取った資金は90億ドルに満たなかった。

拠出される援助資金の額は、対象となる地域によって非常に大きな差がある。1999年コソボと南東ヨーロッパ地域では、難民350万人に対し1人あたり1日59セントの拠出額であったが、それに対してアフリカ難民1200万人には、1人あたり1日13セントであった。

エイズによって、380万人以上の子どもが犠牲となり、さらに1300万人の子どもが孤児になった。過去5年間にエイズは、特に戦禍のひどい国々で、子どもたちの最大の脅威となってきた。被害が最も深刻な国々の推計では、現在15歳の子どもの半数がエイズで死ぬとされる。

1998年には、拠出国はエイズ対策に3億ドルを割り当てたが、実際に必要とされたのは約30億ドルであった。

人道諸機関の協力による世界規模の追跡調査の結果、1994年から2000年の間に、アフリカ大湖地域で子どもたち6万7000人以上が家族と再会した。現在、ルワンダの約4万5000世帯では子どもが家族の長であり、その9割が女子である。

教師や生徒と同じく、学校の建物も意図的な攻撃目標となってきた。例えば、1980～90年代のモザンビーク紛争では、45パーセントの学校が破壊された。

先進諸国が合意した援助目標のGNP0.7パーセントを拠出すれば、さらに1000億ドルを世界最貧国の援助に当てられる。

世界中でおよそ12億の人々が1日1ドル以下で生活しているが、その半数が子どもである。

毎年、約1000万人にのぼる5歳以下の子どもたちが、予防可能な病気や栄養失調で命を落としている。

毎年、約4000万人の子どもが、出生届けをされず、国籍や正式の名前を持つ権利を奪われている。



# 教室での戦い | 根深い差別が今なお多くの学校で見られる

ポール・ワトソン  
(ロサンゼルス・タイムズ紙)

ボスニア・ヘルツェゴビナに平和をもたらすための戦いに、おびただしい数のNATO軍兵士が、数十億ドル相当の戦車やヘリコプターなどの武器と援助金をたずさえて、大勢の外国人行政官に加わった。だが、より簡単な武器もある。黒のマジックペンである。

ボスニアでは多くの学校で、クロアチア系、セルビア系、イスラム系住民の子どもたちに、歴史、芸術、文法だけでなく、他の民族を憎むことも教える。そこで1999年、外国人行政官らが、教科書にあるすべての民族差別用語をマジックペンで黒く塗りつぶすよう命じた。

担当委員会は、24ページにおよぶ消去リストを作成し、語句、段落、時には1ページ全体を問題点として示した。そして教師たちに、これらをすべての教科書から見つけ出し、生徒たちが読めないようにせよと指示した。

セルビア系中学1年生用文法の教科書には、受動態を教える章に、イボ・アンドリッチによって1945年に書かれた小説「ドリナの橋」の抜粋が載っている。アンドリッチはクロアチア系ボスニア人で、ノーベル文学賞の受賞者である。

作品は、中世にイスラム教徒のトルコ人侵略者がセルビア人に対して行った拷問と大虐殺を描写したものだ。教師たちは、この章の2ページを切り取るよう命じられた。

クロアチア系向けの教科書には、足を切断された少年の写真があり、「大セ

ルビア主義侵略者」による攻撃と説明されている。これは黒塗りにしなければならなかったが、指示に従わない教師もいた。

「マジックペンで黒く塗りつぶすかわりに、黄色の蛍光マーカーがよく使われました」と、ボスニア・ヘルツェゴビナ外国人行政官らのために教育方針を作成するクロード・キーファーが語った。

単語の検閲は簡単だが、人の心を変えるのは容易でない。この簡単な真実が、今なおボスニアが直面する多くの難題の根幹にある。

## 深い傷

傷は癒え始めているが、民族間の憎



子どもたちが学校に戻れても、民族間の憎悪が続かないように授業の内容を監視しなければならない。

しみはまだ生々しい。

ボスニアの大半のクロアチア系、イスラム系、セルビア系の各住民は、今なお民族ごとに別れて住み、学校や電話、電気などの公共サービスも別々のシステムが存在する。

北部の町ブルチュコの争奪戦は他に例がないほど凄惨なものだった。1999年3月、国際調停委員会は、三民族は町を共同管理すべきであると裁定した。しかし2000年後半、くすびり続ける民族間の憎しみが学生暴動と爆発し、セルビア系とイスラム

系の十代の若者たちが何日も暴れ回った。

サンヤ・ベチレビッチ(14歳)は1998年に、難民として6年間を過ごしたドイツからブルチュコに戻ってきた。彼女はセルビア系中学1年生クラス(教師は全員セルビア系)に2人しかいないイスラム系生徒の1人である。そのためクラスメートから、自分の立場を思い知らされる。

「私はあの子たちを悪く思わないけれど、向こうは私に悪意を持っているわ」と、母親に持って帰るパンをかかえて、サンヤは言った。「あの子たちは私を侮辱するの。私がこの国にいたら」

「でも女だから、もう1人のイスラムの男の子ほどひどくないわ。とにかく黙ってるの。何を言われても平気、笑ってればいいわ。他の民族の人たちを軽蔑するのは、もちろん馬鹿げたことよ」

そこから1キロも離れていない脇道を、セルビア系住民のデウシュカ・ヨシボビッチ(13歳)が、セルビア系だけが通う小学校から友人と一緒に、家に向かって歩いていた。イスラムの友だちがいるかと聞かれて、とんでもないという風におかしかった。

「あの人たちは私たちと同じみないんだけど、私たちはみんな我慢できないのよ。少なくとも私はダメね」とデウシュカは言う。彼女はボスニア中部のペトロボ村からの難民だ。「あの人たちはどこか違うの、どこか変なのよ」

イスラム系の家族が3軒先に住んでいるが、お互いに決して相手に話しかけたりしない。このはにかみやで礼儀正しい中学1年生は、あらゆるイスラム系の人々を憎むことが間違っているとは全く考えていない。

「戦争の前なら我慢できたわ。でも戦争の後は、お互いに我慢できないの」と言った。





© S. SALGADO

戦争によって、過去10年で少なくとも100万人の子どもたちが孤児となっている。  
隣国のザイールの病院に収容されたルワンダの子どもたち（1994年）。

ようになった。1996年に、カナダは保護者がいないまま庇護を求める子どもの処遇に関するガイドラインを世界で初めて発表した。その2年後、アメリカがこれに次いだ。アメリカ、スウェーデン、ノルウェーなどが子どものための特別計画に拠出金を増やした。

いくつかの機関が新設され、機関同士の連携が強化された。ルワンダの大量虐殺後、諸機関が連携して広範囲の追跡調査を行った結果、アフリカ大湖地域で6万7000人以上の子どもたちが家族と再会できた。

UNHCRはその50年の歴史の中で約5000万人の難民の再出発を支援してきたが、この約半分が子どもだった。

近年、UNHCRは難民の子どもの支援に関する詳細なガイドラインを設けた。UNHCRはセーブ・ザ・チルドレン世界連盟とともに、子どもの問題に

取り組む現場職員の対応能力を高めるため「子どもの権利のための行動」と呼ばれるプロジェクトを開始した。またこのふたつの機関は、家族から離れてヨーロッパにいる子どもたちのための計画を開始した。計画では28カ国のNGOが家族から離れヨーロッパにやってくる子どもを支援している。

それなのに...

多くの会議が開かれ、法律や

条約があり、国際社会がこれまでになく注目して人的・物的支援を行っているにもかかわらず、難民を含む何百万人も子どもたちは相変わらず悲惨な状態のままだ。

考えてみよう。この10年で200万以

上の子どもが殺されている。さらに600万人が負傷して障害者となり、100万人が孤児になった。

数知れない子どもがレイプや拷問、残忍な仕打ちを受け、数百万人が飢えと病気で死んだ。エイズだけで380万

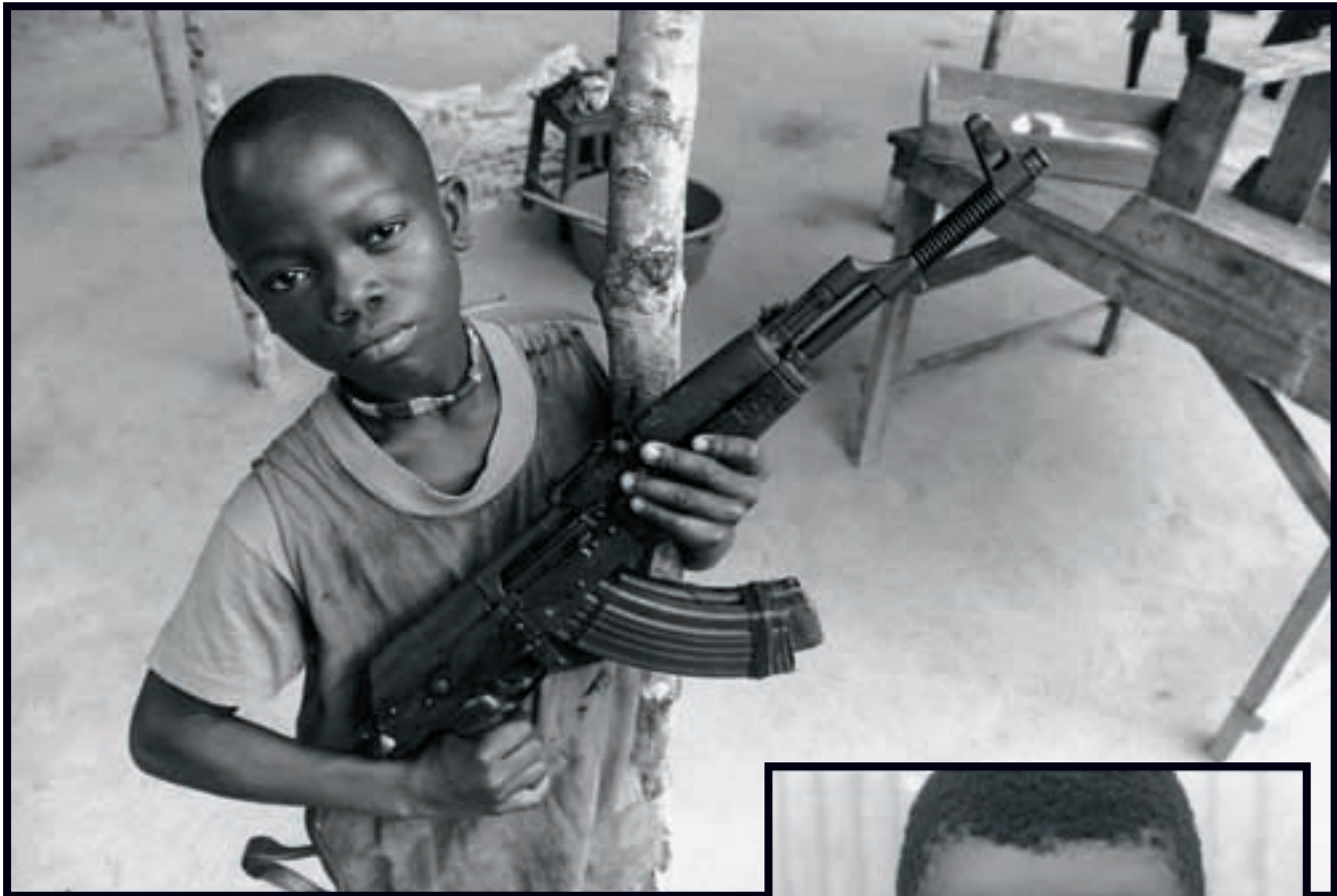
人の命が奪われ、1300万人が孤児になった。

誘拐や強制的結果、現在約30万人にのぼる子ども兵士がいる。拉致された少女

たちの多くが性的な奴隷にされた。国際社会は西アフリカのシエラレオネで起きた内戦で麻薬中毒の反政府軍兵士

その多くが子どもだった が犯した残虐行為を知った。

「現代の戦争はかつてないほど  
無感覚に組織的に人々を搾取し、  
障害者にしたり殺したりする」



UNICEF / G. PROZZI



UNICEF / G. PROZZI

「あいつらから訓練を受けた。銃を渡された。麻薬をやった。普通の人たちを殺した。大勢殺した。戦争だったんだ。戦争をしてたんだ。

僕は命令されただけ。悪いことだとわかった。やりたくてやったんじゃない」

シエラレオネの子ども兵士

「息子2人と娘が1人、反乱軍に無理やり連れていかれた。兄の方が疲れきって地面に倒れると、そのまま処刑された。弟は逃げようとして射殺された。娘は繰り返し集団レイプされた」

子ども兵士の被害者たち

およそ90カ国の子どもたちが、戦闘中の軍隊、反乱軍、反政府勢力が畑や家の近くに敷設した6000万個の地雷のために、死んだり手足を失ったりする危険に常にさらされながら生活している。

暴力で故郷を追われ、難民として周

子どもたちが強制的に兵士にさせられる。シエラレオネの内戦では、子ども兵士らが、一般市民に対する恐怖支配 この17歳の少年は両手を切断された に加担させられた。

辺諸国に逃れたり国内避難民となったりした子どもの数は2500万人に達する。

これらの数字があまりにも膨大で、どのような形でも説明できないため、被害者一人ひとりの苦しみが見えにくくなっている。

マシェル氏の最初の報告書には、多くの子どもたちにとって、世界は「人間の尊厳に対する最も基本的な価値観が欠如した荒れ果てたモラル真空地帯」という、ぞっとする説明がされた。中間報告でも状況は大して改

善されていない。最近引き続いて発表された報告書でマシェル氏は「現代の戦争はかつてないほど無感覚に組織的に人々を搾取し、障害者にしたり殺し



# 巨大な力に立ち向かう子どもたち

毎年、保護者のいない子どもたちが多数、先進国で庇護を申請する。しかし、難民の地位を得られるケースはほとんどなく、多くの子どもたちが地下へ潜ってしまう。誰が責任を負うのか。

## ジュディス・クミン

「西へ向かう不法入国者を引き寄せ  
る港」

「英国をめざす不法入国者29人を拘  
禁」

「だまされたスリランカ人、難民認  
定を拒否される」

今日、西側諸国の多くの新聞がよく似た見出しを掲げ、密入国や「偽りにせよ」の難民の増加に警鐘を鳴らしている。しかし、不安をあおるような記事やそこから必ず生じる否定的な世論の潮流の中で、このような招かれざる客の多くが子どもであり、しばしば保護者もなく、戦争や迫害から逃れてくる場合が多いという事実が見失われている。

こうした不法入国の子どもが、公に取り上げられたりメディアに注目されるケースはほとんどない。昨年のキューバ人少年、エリアン・ゴンザレスの場合はむしろ例外である。母親がキューバから脱出した時に溺死し、その後、アメリカに住む反カストロ派の親族が彼を手許に置こうとして、報道機関がこのテレビ受けのするあどけない少年に群がったからである。

けれども、昨年のクリスマス直前にオーストリアの東側国境をひそかに越えようとした大人たちに交じって、保護者のいないアフガン人の子ども16人が震えているところを発見されされたが、世間の関心は低かった。ソマリア人の子どもたちがチューリヒ空港に到着し庇護を求めたときも同様であった。ニカラグアから独りで何千キロも歩いてアメリカに入った16歳のストリート・チルドレンが、最近アリゾナ州で庇護を認められたという事例も、ほとんど注目されなかった。

アメリカ合衆国の移民帰化局（INS）はこのニカラグア少年のような保護者のいない子どもが、毎年何人ぐらい庇護申請をしているのか統計を取っていないため、回答できなかった。他の西側諸国も同様の状況にある。庇護を求める子どもたちを取り巻く問題があるのは認めるが、問題の規模と重大さを把握していないのである。

また情報があっても、信頼できるとは限らない。というのは、子どもの年齢を確認するのは難しく、保護者に「同伴されて」いるように見えても、一緒にいる大人が、実は子どもの世話を

法律の上では、子どもの権利は  
ほぼ全世界的に認められている。  
だが、子どもたちは  
様々な形の迫害に直面している。

する意思も資格もない場合が少なくない。

## 対応の失敗

それでも著しい数の子どもが先進国で庇護を求め、各国がその対応に苦慮しているのは明らかだ。先進諸国の対応はさまざまである。具体的には、子どもたちを収容所に拘禁したり、レントゲン撮影による年齢測定を行ったり、「安全な」第三国へ送還したりするなどの厳しい管理を行う国から、真剣に未成年者たちの世話をしようとする国まで、いろいろである。

最低限の数字が入手できる最近の統計は1999年度のものだが、この年、親と離ればなれになった子どもたちで、

西ヨーロッパや北アメリカ、オーストラリアで庇護申請した数は2万人以上にのぼる。この数字は、世界各地で暴力や迫害によって故郷を追われた子どもたちの一部に過ぎない。専門家は、世界の難民や国内避難民の半数は子どもであり、過去10年間に世界中で200万人以上が紛争で死亡したと推定している。

法律の上では、子どもの権利はほぼ全世界的に認められている（2カ国を除くすべての国が1989年の「子どもの権利条約」に加入）。だが、児童労働やレイプ、女性性器切除、強制的徴兵にったり、親や兄姉が拷問や処刑される現場を見せられたりするなど、子どもたちは様々な形の迫害に直面している。したがって、親が子どもを安全な所へ送ろうとしたり、子どもたち自身が脱出を試みるのは驚くべきことではない。

現在、子どもが難民となれる権利を持っていることは広く認められている。1996年、カナダ移民・難民局は、「未成年の難民申請者に関する指針」を発行したが、これは難民認定制度を持つ国が作成したこの問題に関する世界初の指針である。2年後の1998年、アメリカの移民帰化局（INS）は「未成年者による庇護申請のための指針」を発行した。両指針ともに、子どもと大人では迫害の受けとめ方が異なり、そして、子どもに配慮した認定手続きが必要であるとしている。

保護者と離ればなれとなって庇護を求める子どもたちが最も行きたがる先は、西ヨーロッパ、特にオランダ、北欧諸国、スイスである。最近、UNHCRとセーブ・ザ・チルドレン世界連盟の

## 巨大な力に立ち向かう子どもたち

主導によって、「欧州離別児童計画」が設立された。これは子どもを対象として活動する28カ国の非政府組織のネットワークである。この組織が最も懸念する問題は、子どもたちの中に、本物の難民がいるという点と、また密航業者によって儲けの大きい欧州市場へ売春や低賃金労働の目的で送りこまれる被害者が多いという事実である。

難民の子どもの問題への取り組みは、ほとんどの国で遅れている。カナダでは199

9年夏、西海岸に中国人の子ども約130人が親に伴われず4隻の船で到着したが、それまで同国の担当職員たちはこうした問題に関心を払っていなかったと率直に認めている。1997年にUNHCRが「保護者を同伴しない未成年者の庇護申請処理の方針と手続きに関する指針」を発行したにもかかわらず、UNHCRが勧告する最も基本的な事項ですらまだ完全に守られていない。

### UNHCRの指針

指針は、政府と児童福祉機関が取り組むべき事項を明らかにしている。最も基本的な事項は「親と離ればなれとなった」子どもの定義として、18歳未満で、出身国以外の地におり、養育や保護にあたる親、あるいは他に法的または慣習上の後見人がいない者とされている。この定義は簡単なようだが、こうした子どもたちは、身分証明書が



保護者のいないコンゴ出身の子どもたちが食事を待つ。(1999年イタリアのレッチェ)

偽のものだったり、まったく持っていない場合も多い。そして彼らの多くが自分の年齢を知らないか言いたがらない。

当局は子どもを装った大人にだまされて特別の待遇を与えるのを避けるため、レントゲン撮影や歯科検査その他の技術を使って、申請者が実際に18歳未満であるかどうかを立証しようとする。人権を侵害せず、文化的にも適切な医学的調査方法で分かるのは、およそその年齢だけであり、もし子どもが誤って大人と判定されると、資格があるにもかかわらず特別待遇を拒否されてしまうのである。

スイスでは、1999年に1775人の庇護申請者が18歳未満であると主張した。しかし、庇護申請上訴委員会は最近、年齢測定用の骨レントゲン撮影を廃止することを決めた。この調査には誤りの発生するおそれが非常に大きい

と専門家が指摘したためだ。

庇護を求める子どもたちを拘禁しないよう、UNHCRは各国に要請しているにもかかわらず、多くの国が拘禁を行う。自国に難民が来ないようにするための抑制策として拘禁を意図的に行っていると認める国はまずない。密航業者のえじきとにならないように子どもたちを保護するためだと主張する国もある。

1999年の報告では、アメリカの移民帰化局（INS）は保護者のいない、多くは庇護を求める子ども4600人を拘禁した。長い間、子どもの拘禁が日常的に行われていたオーストリアでは2000年10月に、子どもたちが少なくとも法的支援を受けられるよう、内務大臣が拘禁条件の改善指示を出した。

### 後見人

子どもたちは未知の国での自らの権



利を知っているはずがない。このため、親から離別して庇護を求める子どもたちにふさわしい後見人を指名するよう UNHCR は各国に要請している。各国とも自国の子どもには当たり前に後見人を指名するが、UNHCR による要請はほとんど聞き入れられていない。

注目すべき例外もある。スウェーデンでは、親と離ればなれになった子ども全員にスウェーデン語で「善良な人」と称される後見人を付ける。ノルウェーでは後見人の指名が法律で義務付けられているが、応募者が不足している。オランダでは、「デ・オブポー」という組織のソーシャルワーカーが後見人として指名される。しかし、子ども一人ひとりの養育、教育、家族の捜索を行うには取り扱い件数が多すぎる。

後見人の指名に加えて児童福祉団体の関与も非常に重要である。というのは、子どもが入国時に大人と一緒にあっても、その大人は子どもの世話をする意志も能力も資格もない場合や、「おじ」や家族の友人の住所だけを持たされてくる場合があるからだ。国境管理当局は、選択の余地がなく、子どもの養育が可能な人物かどうか確認せずにその人物に子どもの引き取りを要請する。

ある西アフリカの10代の少女が、「おじ」と一緒に暮らすようカナダへ送られたが、数カ月後に教会の職員に怯えながら告白したのは、おじの子どもを妊娠させられ、学校へ通っておらず、庇護申請もせずに召使いとして働かされていたという事実であった。

西側諸国の庇護申請手続きは、弁護士の法的支援なしには進めるのが難しいにもかかわらず、後見人と同様、弁

護士がつくことはまれである。親と離ればなれになったまま庇護を求める子どもたちの多くは、自分たちに弁護士 の助言を受ける権利がある事実も、弁護士を頼む方法も知らない。弁護士費用を払える者はまれである。

### 難しい問題

「子どもの権利条約」第3条では、子どもに関するあらゆる措置において、子どもの最善の利益を第一に考慮しなければならない、と規定しているが、何が子どもにとって最善の利益になるかを決定するのは非常に難しい。船でカナダに到着し庇護申請をしたものの大半が却下された中国の子どもたちに関する論争は、問題がいかに困難であるかを物語っている。航海に耐えられない危険な船と知りながら子どもを乗せ、現代の奴隷として売り渡すような親の元へ返すのが子どもにとって最善

の利益だろうか。自由の身にされて中国マフィア「蛇頭」の手中に陥るのが子どもの利益だろうか。

カナダでは親と離別した子どもが難民と認定される率は50パーセント近いが、大半の西側諸国ではほとんど難民と認定されない。各国は人道的理由や帰国不可能という理由で、このような子

もたちの滞留を許可しているものの、1999年度のヨーロッパで親のいない子どもが難民と認定される割合の平均は、わずか5パーセントほどだった。

庇護申請が却下されると、子どもたちは本国への送還から逃れるため、多くの場合、地下に身を隠してしまう。明らかに最も弱い立場にあるこうした子どもたちのその後については、ほとんど何も分かっていない。

たりする」と語った。

戦争の質そのものが変わってしまったのだ。国の中での民族、宗教、政治をめぐる激しい争いが、国家間の紛争にとって代わり、非戦闘員が故意に狙われた。子どもは殺されるべき「厄介者」、あるいは性的奴隷や兵士にするため誘拐の「獲物」と見なされている。多くの子どもが直接難民キャンプから誘拐されたり徴兵されたりする。

紛争中に、犠牲者となる市民と兵士の比率は、第1次世界大戦中には兵士100人に対して市民5人であったが、今では90人に増えた。

大規模な戦闘を伴わない紛争は、コソボ紛争のように注目されず、援助資金も集まりにくい。しかし子ども被害者の大半が目立たない紛争地域にあり、生き延びようと苦闘している。

人であふれかえり、しばしば不衛生な難民キャンプと戦場が、エイズが蔓延する温床となった。マシェル氏によると、エイズはこの5年間で「他のどんな要因よりも戦争の様子を変えてしまった」。今では、「エイズは紛争に巻き込まれた子どもたちへの危険を倍増させる最も強力な新しい要因である」。

世界中の新たな感染者の50パーセントが15歳から25歳であり、最も深刻な影響を受けている国々では、現在15歳の子どもの半数がエイズが原因で死亡すると推定される。詳細なデータがある最も新しい年の1998年には、抛出国が3億ドルをエイズ対策資金として発展途上国に割り当てたが、推定必要額は30億ドルだった。

ザンビアのティーンエイジャー向け月刊紙の編集者メアリー・フリーさんは「私たちが未来なら、そしてその私たちが死んでゆくなら、未来などない」と訴えている。

子どもへの残虐行為の多くは、アフガニスタンやスーダンなど秩序が失われた遠い国々で起きている。しかし、移動が容易になり、金さえ払えば密航

親と離別した子どもが、大半の西側諸国ではほとんど難民と認定されない。1999年度のヨーロッパで親のいない子どもが難民と認定される割合の平均は、わずか5パーセントほどだった。



© S. SALGADO



© S. SALGADO

地雷は世界約90カ国で、子どもたちに惨禍をもたらしている。国際赤十字の整形外科事業によって回復訓練を受ける被害者（写真上）と、地雷の認識教育を受ける子どもたち。

業者らがだれとでも取り引きするような、急速に小さくなった世界で、子どもたちは自らが抱える問題をそのまま先進国に持ちこんでくる。先進国は対処の仕方がわからない。子どもたちを非常に手厚く迎える場合もあれば、拘禁するだけの場合もある（p.11参照）。

対応には時に極端な差がある。アメリカはベトナム戦争以来、最大数の子どもの正式な第三国定住計画として、スーダンから約3600人の故郷を追われ

（INS）の保護下におかれており、強制送還される恐れに直面している。

ヨーロッパは多くの未成年者たちが好んでめざす場所である。世界中から常時10万人もの保護者のいない子どもがこの大陸の中を動きまわっている。1999年には、家族から引き離された子ども約1万4000人もが庇護を求めた。子どもを安全な場所に逃がそうと必死になった親に送られてきた子どもも多くいた。自分でヨーロッパへ逃げてき

た子どもを迎え入れるとし、最近その第一陣を迎え入れた。その一方で、この国に到着した幼児からティーンエージャーまでの数千人の子どもたちが、移民帰化局

た子どももいるが、次第に増えているのが密航業者らに送り込まれた子どもたちだ。今年初め、さびついた貨物船がフランスの高級リゾート地リビエラ海岸に乗り上げた。浜辺にたどり着いた1000人程のクルド人にどう対応すべきか、国中に論争が巻き起こったが、そのクルド人の半分が子どもだった。

子どもたちのこうした流入に対してヨーロッパの反応はさまざまだ。スカンジナビア諸国では、一時的な保護者を割り当てる制度を含め、家族から引き離された子どもを支援するための包括的な体制が整っているが、他の国々では収容されるだけだ。

「やあ、パパ。パパがいた時にはよく一緒に野原を散歩して、ママに花を摘んだよね。でも（首都の）グロスヌイに行ってしまうってから、パパから何の連絡もない。パパがいないと



つらいよ。他の子どもにはパパがいるのに。大きくなったら、戦争を止めさせてみんながパパと暮らせるようにするよ」スパルタクより

チェチェン紛争で行方不明になった父親への手紙

2001年9月開催予定の国連子ども特別総会で1990年「子どものための世界サミット」以後の進展状況が検討され、今後10年間の優先事項が決定される。

UNICEFのキャロル・ベラミー事務局長は、国連安全保障理事会など国際的な場で子どもの問題を討議すること、ほぼすべての国による子どもの権利条約の批准、戦争などの理由で故郷を追われた子どものためのより柔軟な人道援助計画の展開には大きな進歩があったと語った。

しかし現実には、今、子どもを巻きこんでいる危機の多くが急速に悪化

し、対処のための人的・物的資源の量が追いついていないようだ。

武力紛争に巻き込まれた子どもを担当する国連事務総長特別代表オララ・オトゥヌ氏が本誌に対し、この10年でスリランカ、コロンビア、アンゴラなどの多くの地域で子どもを取り巻く環境がずいぶん悪化したが、国際社会はこの問題にまともに取り組んでいな

18ページに続く

## 6歳の子どもが法廷に

保護者がいない多くの子どもたちが、アメリカで拘禁されている

エイミー・ドリスコル

6歳の子が、独りで入国管理（入管）法廷に座っていた。弁護士も家族も、保護者さえもない。ナイジェリアから着いたばかりで一見浮浪児のようなこの女の子は、目を大きく見開いて、マイアミ市のクローム拘留センターの窮屈な法廷に座っていた。アメリカ政府に召還されたのだ。

罪状は不法入国だった。

毎年、入国書類が偽（にせ）であったり、又はまったく持たずに、陸路・空路でアメリカにやってくる子どもが大勢いる。この少女も密入国者だと入国管理官らは言う。子どもたちの多くが、少しでもましな生活をさせたいと願う貧しい家族から送り出されてくる。苛酷な労働条件の工場に労働力としてひそかに送り込まれる子どもたちの中には、中国人未成年者も多い。ほかには、メキシコの子どもたちのように、徒歩で国境を越えてくる者もいる。

こうした未成年者の全員が、米国移民帰化局（INS）の管轄下に入る。INSは、子どもたちの人生に全責任を負っていないが、同時に彼らの強制送還を求めている。

INSによれば、1999年には不法入国した保護者のいない未成年者4600

人以上が拘禁された。実際数はもっと多いと難民支援団体は見ている。組織的な子どもの密入国の増加にも影響されて、不法入国の数が近年、確実に増加しつつある。

拘禁されると、弁護士に接見する権利が認められる。ただし弁護士を雇える余裕があるか、無償の弁護士を見つけるられればの話だ。最終的には多くの子どもたちが、法廷で陳述もできないまま強制送還されている、と保護団体は主張する。

「本国送還は、時に文字通り生死をわける重大な決定となります」とニューヨークにある「難民女性・子どものための女性委員会」のウエンディ・ヤングは言う。「子どもに、弁護士の助けもなく裁判を受けさせても、裁判に勝てることはまずありません」

### 全国調査

ジョージタウン大学の最近の全国調査によると、法廷で弁護士による陳述を行えば、不法滞在者に庇護が与えられる確率は4～6倍になる。

ヤングが所属する委員会から近々出される報告書は、INSが逮捕をする側と弁護側との双方の役目を果たすべきか、という問題を提起している。

全米で拘禁されている子どもたちの21パーセントは、数日のうちに国外退去させられる。親戚や友人に引き渡された子どもたちでも、送還されてしまう可能性もある。

INSは、1年間に約100人の子どもたちが、弁護士もつけられずに入管法廷に送られていると見ている。マリア・ガルシア報道官は、INSは子どもたちの助けとなるよう最善を尽くしていると言う。子どもたちは拘禁された時に、まず拘禁された者が持つ権利の一覧を手渡される。入管担当の判事は、子どもたちがこれらの権利を理解しているかどうかを再度確認する。「子どもなので、十分に説明を受けたかどうかを確かめなければなりません」

しかし、ポップ・グラハム上院議員とアルシー・ヘイスティングズ下院議員は、保護者のいない未成年者が、法律制度と児童福祉担当官をもっと利用できるような新法を提案している。「子どもが親も保護者もなくこの国に来れば、何の予告もなくINSの手に落ちてしまうことでしょう」とヘイスティングズ議員は言う。「こんな状態が続いてはいけません」

マイアミ・ヘラルド紙提供

# 「私の責務は難民の保護で、 ルドルフス・ルベルス高等弁務官、UNHCRの将来像を語る。」

本誌 高等弁務官の任務に臨むにあたってあなたの経験で役立つ点は何でしょうか。

ルベルス 私には、実業家、政治家、NGO活動家、学者の経験があり、そのすべてがUNHCRの役に立つと思います。たとえば、UNHCRは難民の利益のため、実業界と新たな協力関係を作ろうとしています。私はその橋渡し役になれるでしょう。UNHCRの活動は非常に政治色の濃い環境で行われます。難民を助ける、より良い組織を作るために、私はためらわず政界での経験や人脈を利用するつもりですし、また主要な目標のひとつはNGOとの協力関係の強化です。私の学問上の専門分野はグローバル化と組織の管理ですが、これらは直接UNHCRに関連するものではないでしょう。

選任時に、一部マスコミから難民とかかわった経験も難民キャンプを訪れたこともない、と指摘されましたが、

難民キャンプや発展途上国だけに難民がいるわけではありません。庇護は世界的な問題であり、私が政界や政府で取り組んだ問題です。UNHCRや難民について学ぶべきことは多いですがまったくの初心者ではありません。

政界での経験をどのように活かしますか。

最近、西アフリカの危機を直接目にしました。ギニア南部に取り残された何万人もの難民がいる場所へ行く安全と、難民が安全に移動できる原則を確保するため、ギニア、シエラレオネ、リベリアで多くの時間を割いて地域の指導

者たちに協力を求めました。現地の状況は依然として危険かつ不安定です。しかしギニアの協力を得て、UNHCRと協力機関は難民たちへの援助活動を1週間以内に再開できました。

UNHCRの将来像をどのように捉えていますか。

国際社会全体から幅広く支援され共有される、名実ともに多くの国々が参画する機関になって欲しいものです。UNHCRは設立されて50年になるが、難民問題が今後もなくなるのには明らかです。国際社会が必要とするのは、保護任務を遂行し、難民の強力な代弁者として働き、各国に対し1951年の難民条約に定められた義務を履行させる

る有能なUNHCRです。

UNHCRは必要な資金援助を幅広く受けていますか。多くの国がUNHCRに資金を提供しているが、あまりに

限られた額です。国際社会はUNHCRに世界の難民を保護し難民問題の解決を求めるといった任務を与えました。しかしその国際社会のメンバーの多くが、我々の任務を支援する責任をほとんど、あるいは全く果たしていません。これは容認できません。現在は比較的少数の拠出国から任意の資金提供を受けています。多くの国が場合に応じ、いつ何を援助するか決めていますが、これがUNHCRを弱体化させています。

より確実に安定した資金確保の仕組みが必要だと考えるわけですね。

そのとおりです。それほど大きくはな

い正当な額を要請しているがこの2年間、予算に対し20パーセントの資金不足です。今、中核となる活動を特定する作業を行っています。これらの活動には確実な資金提供が不可欠です。また特別な、予測不可能な緊急事態や危機に対応する能力も必要です。難民問題を解決するための活動をUNHCRと長期的に行うにあたり、より多くの国が資金の拠出を当然の協力事項と考えるべきです。

人員削減など緊縮措置をとる予定ですか。

実業界や政界で長年、厳しい緊縮財政を実施しました。UNHCRにもこの措置が必要です。無駄の無い機関は堅固です。職員の業務を再検討しなければなりません。「それは適切か」「我々の機関がすべきことか」といったように。私たちは、現在、特定しようとしている中核事業に専念するのです。しかし優先順位をつけて事業を削減する必要があります。削減を受け入れられない分野に関しては、各国政府を説得するのが、私の責務です。

UNHCRに対する期待は大きすぎると思いませんか。

UNHCRは実施能力のある機関、困難な状況下で事業をやり遂げる能力を持った機関と見なされています。人道問題が起きると、人々は「UNHCRなら対処できる」と考えます。さらにその任務は無償で行えると考えているようで、電話をかけてきて「やってくれ」と言うだけです。しかし我々の力にも限界がある。したがってUNHCRの運営への参加と拠出金を増やすようにする一方で、期待がかけられすぎないよ



# これを守り、促すことです」

うにする必要があります。

では、UNHCRの活動内容は縮小されるべきですか。

拡大は望んでいません。難民が我々を必要とする場合には援助を行うが、現実的であることも必要です。中核業務の範囲内で最善を尽くすが、UNHCR以外の機関にできる活動も明らかに多い。UNHCRは調整役となり、我々の任務にある難民の保護が、最善の方法で、共同で実施されるようにするのです。

民間の分野についてはどう考えられますか。

NGOや実業界など、他の組織との連携が今後進みそうです。UNHCRや難民は、世界各地でそれぞれのニーズに応じるため、民間からすでに資金・現物支援を受けています。こうした分野の連携は今後も推進する必要があります。

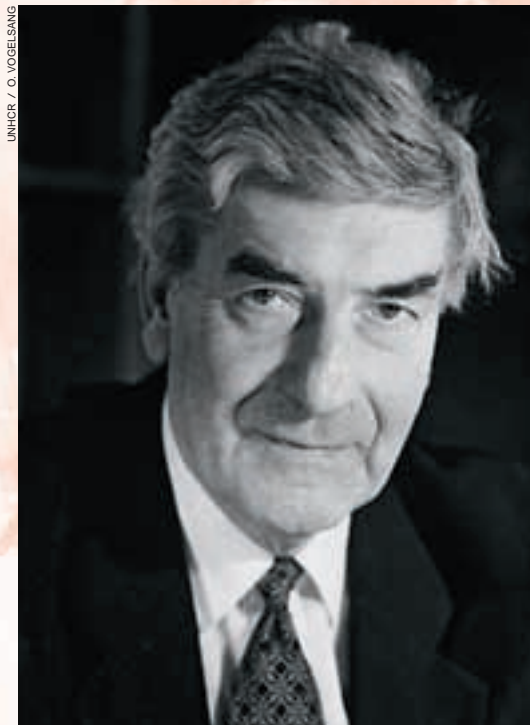
「援助疲れ」が話題になっています。国際社会の姿勢に根底的な変化が生じたのでしょうか。

冷戦時代には、敵対する国家から逃れてくる人々を支援することに政治的、思想的な利点がありました。今、その思想的支えは存在しません。そして「同情疲れ」が起こりました。もうイデオロギー論争もない。先進国側は民主主義と自由市場経済が最良のシステムであると証明したと認めるようです。しかし、ますます広がる貧富の差は、難民問題に最も明確に反映されています。

国内避難民（IDP）は、UNHCRが責任を持つべきですか。

国内避難民に対する責任は、国連システム全体と国際社会にあります。UNHCRは、1970年代初めから30を超すIDPへの援助活動に携わってきましたが、常に特定の基準に従いました。つまり、IDPに関しては、国連と当事国の同意を得て、我々に必要な資源があり、要請された場合に援助活動を行ったのです。UNHCRはすべてのIDPを

人命救助のための援助活動に背を向けるわけにはいきません。この10年間、UNHCRは次々に危機が起こるたびに大きな負担を背負ってきました。人道援助事業すべてにかかわるようになると、ほかの、同じように重要な保護活動がおろそかになるおそれがあります。我々の中核業務は、難民の保護であるべきです。



UNHCR / © VOELSANG

危機に振りまわされたくないとお考えなのですね。

そのとおりです。難民問題は大きな問題で危機発生時のことだけではありません。我々は、単に危機だけでなく、その原因や予防、適正な統治への支援を考えたい。持続性のある解決を探る必要があります。発展途上国の法体系強化を支援するため、UNHCRと他の組織が連携できるネットワーク作りも必要です。これは政治的な危機を未然に防ぐための長期的な活動であり、非常に重要です。

一部の国、特にEU諸国から援助が足りない、はっきり発言されていますが。

豊かな国々が、難民が発生する国で解決策を模索するUNHCRへの支援

を拒絶する一方で、入国ルートを閉ざし厳しい庇護政策を続ければ、庇護を求める難民が自国に押し寄せるのを防げると考えるのなら、それは非常に近視眼的です。世界各地におけるUNHCRの活動を支援することは、富める国々のためになります。EU諸国は庇護申請者や不法入国者の増加に不満を表明しながら、UNHCRに対する拠出金を急激に減らしました。これは、合理性、政治的合理性の欠如といえます。

緊急援助や事業活動が過度に強調され、保護というUNHCRの任務がおろそかになっている、との批判もあります。

難民の保護が高等弁務官としての私の責務です。この点に妥協の余地はありません。保護活動の擁護と促進に焦点を合わせています。保護は人道援助の大事な部分です。緊急時にすぐ必要な

© M. KOBAYASHI

15ページより続き

い、と語った。「私たちは会議に多くの時間を費やした。私たちは多くの規則を定めるのは得意でも、それらを実施することは非常に不得意だ」

グラサ・マシェル氏はこの意見に同意して次のように述べた。「私たちは

関心事は、UNHCRなどの機関が直面する無数の問題をなくせるかどうかではなく、なんとか現状を維持できるだけの資源があるかどうかということになりそうだ。

昨年の終わりにUNHCRのソレン・ジェッセン＝ピーターセン高等弁務官

「ニーズが増えても人道援助のための支援総額は増えませんでした」とUNHCR子ども部門の責任者クリスティナ・リナーが付け加える。「私たちは皆ひとつの鍋を分け合っていますが、この鍋でまかなわねばならない人数がますます増えているのです」



UNHCR / R. REIDMUND

戦乱の最中でも、子どもたちは工夫にたけ立ち直りも早い。戦争で破壊された家の瓦礫に囲まれて遊ぶボスニアの子ども（1990年代初め）

大きな進歩を達成しましたが、新たに多くの問題が噴出するのを阻止できませんでした。100万人の子どもたちを支援できても、突然200万人の新たな被害者が出てはお手あげです。そのため今後10年間は、これまでの10年間と同様 特にUNHCRのような機関には 困難な期間となるだろう。

ある専門家によると、子どもを対象にした教育などの計画の必要性を認める国際組織が増えてきた。しかし、認識はされても時期が悪い。緊縮予算時代を迎え、今度の特別総会での主要な

補がある会議で語った。「UNCHRの計画を実施するのに必要な1ドルに対し、抛出国は現在80セントしか出していません。不足分の20セントは、子どもたちの前途のために絶対に必要な資金です。特に教育・職業訓練計画に必要です。現場では、難民の生活上のニーズを満たすために日々苦闘しています。教育、カウンセリング、子どもの心の傷をいやすプログラム、スポーツなど、非常に大切とわかっていますが、こうしたものすべてが途中で隅に押しやられています」

「6年間、私の学校は列車の車両でした。勉強しやすい所ではありませんでした。夏はとんでもなく暑く、冬はとてつもなく寒い。冬には持っている服を全部着込みました。ズボン2本、シャツ1枚、ジャケット1枚に帽子です。寒さの中で1時限か2時限が終わると、先生はたいてい私たちを帰らせてくれました」

アゼルバイジャンの17歳の学生

「教育」は、ジェッセン＝ピーターセン高等弁務官捕が会議でのスピーチで強調し、UNHCRが特に注目すべき分野として指定した5つの重要課題の



# 駆り出される子どもたち 難民化と徴兵のつながり

レイチェル・ブレット

シエラレオネからスリランカに至るまで世界中で銃を手にした少年少女の姿が見られる。同時に、武力紛争から逃れる人々の流出もよく知られている。しかし、子どもの徴兵と難民化の間にはどのような関係があるのだろうか？

1996年の国連報告書「武力紛争が子どもに及ぼす影響」によると、家族と離ればなれになった子どもたち、特に難民となる途中で家族とはぐれた子どもたちは、子ども兵士となる危険性が最も高いとされる集団のひとつだ。こうした子どもの立たされている危うい立場に対する認識が、UNHCRを始めとする人道諸機関による、18歳未満の子どもの徴兵禁止と戦争参加禁止の原則に対する支援につながった。

実際の活動レベルでは「子どもの権利のための行動（ARC）」と呼ばれる訓練プログラムの一部で、子ども兵士の問題が扱われている（現在、戦闘に加わっている18歳未満の子どもは約30万人）。また国連の国内避難民に関する指針では、避難民の子どもの徴兵を禁じている。

同報告書で特定されている主な「徴兵される危険にある集団」とは、教育をほとんど、または全然受けていない子ども、最貧層が崩壊した家庭の子ども、そして紛争地帯の子どもである。これは、子どもたちが強制的に兵士にされたか、あるいは「自発的に」兵士になったか、またどのような組織、つまり政府の正規軍か、民兵や反乱軍のどれに属しているかには関係なく当てはまる。

## 密接なつながり

別名「マシェル・レポート」と呼ばれるこの国連報告書によると、徴兵と難民化とのつながりには別の側面があ

る。裕福な家族は自分たちの子どもを学校や国内の安全な地域、外国に送り出し、時には家族全員が移住して子どもたちを守ろうとする。

「裕福な」層のこうした動きは兵役対象人口の急激な減少となり、恵まれない子どもたちがさらに徴兵されやすくなるという不幸な連鎖反応を起こす。

個々の子どもや家族の動きは、難民の統計に表われないこともある。しかし、保護者のいない難民の子どもの増加と、さらに大きな動きである戦乱地域からの庇護希望者の流出が、子どもの徴兵という危険に密接に関係してい



ると見られる。

たとえ子どもたちが紛争地域から脱出しても、徴兵から逃げきれないかもしれない。難民キャンプが兵士らに支配されている場合もあり、国境を越えて徴兵される場合もあるからである。トルコの反政府組織PKK（クルド労働党）は、遠くスウェーデンやドイツ、フランスにあるクルド人のコミュニティから子どもを徴兵した。

子どもたちを徴兵から守ることが、保護の包括的な戦略に組み入れられねばならないのは明らかである。このため「子どもの権利条約」の新しい選択議定書では、紛争当事国だけでなくすべての国家に対して、軍・武装組織が

18歳未満の子どもを徴兵するのを防ぐよう求めている。

コロンビア国内で起きた広範囲にわたる避難は、多くの要素によって引き起こされた。その中には、紛争当事者らに子どもを徴兵されないために逃れたか、あるいは子どもたち自身が徴兵を避けようと避難した、という要素も含まれている。

この状況は、子ども兵士の復員と社会復帰に対する大きな問題を明らかにしている。これまでは復員・社会復帰のプロセスは戦闘が終わってから行われたが、コロンビアの場合には、いまだに不安定な状況の中で、戦闘勢力から子どもたちを引き離す努力が行われているのだ。

ではこうした子どもたちを適切に保護するにはどうしたらよいのか。すでに難民や避難民となったかも知れない家族の元に、どのように戻せるか。社会への復

帰、経済的な自立に通常伴う問題にはどう対処するのか。

難民化と徴兵には関連があり、難民・国内避難民の子どもには、いっその保護が必要だ。その対策としては、全世界を対象とした包括的な出生登録や、家族離散の防止、それが不可能な場合には、離散家族の再会促進が不可欠である。さらに、たとえ紛争中であっても男女を問わず、すべての子どもに教育を与えること、そして子どもたちの持つ基本的な権利を子ども自身に教えることが挙げられる。

レイチェル・ブレットは、在ジュネーブ・クエーカー国連事務所副代表（人権・難民担当）

ひとつである。ほかには、「子どもと家族との離別」、「子どもの性的搾取」、「子どもの徴兵」がある。そして見落とされがちなのが、問題が起きやすい「青少年期」の扱いだ。子どもから大人への移行期であるこの時期に悪い方向へ行くことも多いが、若者が能力を

最大限に伸ばせる時でもある。

ベラミーUNICEF事務局長は本誌に、他の多くの機関同様、UNICEFは教育に当てる資源を増やしていると語った。「以前はおそらく、子どもに食料、避難所、医療を提供するのに手一杯で、教育はどちらかと言えば後回し

でした。私たちはこの状況を変えようとしています。教育は争いと不寛容を防ぎ、平和を導く条件を確保するためのカギとなる戦略です」

人道機関は次第に学校教育をあらゆる問題とたたかう有効な手段と見なすようになってきている。

# 心に傷を負った子どもたちを救う

## 効果をあげるカナダの心理療法プログラム

### ナンダ・ナ・チャンパサク

「おとうさんは死んで、おかあさんは行方不明のまま。とてもつらい。妹も同じ。両親のことを思っていつも泣いているの。神様が返してくれるかなって」

この悲痛な気持ちを書いたシエラレオネの子どもをはじめとして、過去10年間に推定1000万人の子どもが、戦争や暴力から逃れた後も、深刻な心的外傷(トラウマ)で苦しんできた。

多くの子どもたちが、専門家の助けなど届かない、遠い難民キャンプや最貧国で何年も苦しい生活を送っている。カナダのような先進諸国に来て比較的安全な状態に置かれても、深い心の傷がいやされない子どもも少なくない。

こうした病気は本人や家族ばかりでなく、子どもたちを受け入れた地域社会にとってもとりわけ難しい問題である。

大都市トロントは、市内の学校に50カ国以上の出身国の子どもたちが生徒の登録をしている人種のつぼだ。中には難民としてつらい体験をした者もいる。

こうした子どもたちに、受け入れ側の社会はどのように対応すべきだろうか。国際児童研究所(ICI)上級顧問のエスター・コール博士によると、教師にはまず、「心の傷に苦しんでいる子どもに手を差し伸べ、力になれるツール(道具)が必要です。教師は心理的な応

急処置の訓練を受けなければなりません。これは、心的外傷の全体像を理解するためであり、するべきこと、してはいけないことを知るためです」

コール博士は、子どもの精神衛生を支える「橋づくり」(ビルディング・ブリッジ)という名称の、地域社会に基づく心理療法プログラムの開発に協力した。

このプログラムはトロント市内6カ所の学校で試験的に実施され成功している。これは、子どもや親、教育者、市の職員、そして精神衛生の専門家との論議から、最良の実施例を集めてまとめたものである。地域社会に根ざした、学校を中心に活動するプログラムが開発された。「その基本は苦しんでいる子どもの話をよく聞くことだった」と元校長で研究所の顧問を務めるデービッド・グラドストーンは語る。

### みんなの願い

当たり前のようだが、苦しんでいる子どもの願いは、ごく普通の子どもたちと同じだった。つまり友だちを持ったり、スポーツをしたり、学校で良い成績をとったり、英語を話したり、そして「安心できる」といったことである。そこで、「橋づくり」プログラムは、心の傷に苦しむ子どもを特別扱いせずこの問題に取り組み、みんなとの一体感のような目に見えないものを子どもたちに与えなければならなかった。

一連の教室内での活動が考え出されたが、これらは新しく付け加える活動ではなく、教師がすでに教室で行っている活動の延長として慎重に作られたものである。「仲良しチーム」は友情を広げ、文化的な違いの橋渡しに役立つ。また、自己表現によって感情的なストレスの発散を助け、自尊心と自信を養う別の活動もある。「友だちと意見を交換しよう」では、子どもたちが話し合い、差別的な言葉をあびせて相手を傷つける行為や、いじめなどの個人的な問題を解決するよう後押しする。

プログラムはかなりの成果をあげた。トロント市内のほかの学校にも導入されており、その理念は遠くにまで広がった。

もう一人の元校長で研究所教育顧問のミリアム・ディ・ジュセッペは、クロアチア、ボスニア、アルバニアの学校でこの手法を実施できるように、現地に合わせて計画を作り変える作業を手伝った。

ICI研究所は、難民キャンプにいる子ども向けに、「橋わたし」という心理療法プログラムの手引き書を編集している。これには「橋づくり」の中心的な目標と具体的方法が多く取り入れられ、難民キャンプで心理療法の実施方法を示せるよう改良が加えられている。

ICIについての詳細は  
[www.icichildren.org](http://www.icichildren.org)



「人生とは、笑顔の友だちがいる教室。日光。機関銃のない街、地雷のない野原。穏やかさ。お母さんとお父さん、そして兄弟姉妹のいる家庭」

西ヨーロッパに定住したアフガニスタンの少女

大人になって生計を立てていくため、すべての子どもに学校教育と職業訓練が必要なのは明らかだ。しかし、難民の子どもには、故郷に帰還したり第三国に再定住した後、生活やコミュニティー、国を立て直すために、教育や訓練が2倍重要になる。

UNHCRは教育を、「子どもの権利条約」が定める基本的人権であるだけでなく、有効な「保護手段」でもあるとしている。「授業に出る」という簡単な行動が混乱状態の社会に安定と正常



UNHCR / A. HOLLIMANN

UNHCRの事業協力団体による心のリハビリを目的とした授業を受けるグルジアの子どもたち。

さを取り戻す第一段階なのである。また、学校が子どもたちを街角から遠ざけることで、性的・軍事的に子どもたちが使われるのを防止する。これは効果がある典型的な難民保護活動といえる。

ところが、学校の重要性が明らかで

も、故郷を追われ、難民・国内避難民として暮らす推定2500万人の子どもに教育を受けさせるのは非常に困難だ。多くの子どもたちが、教室、先生、教科書とは無縁な場所、すなわち、雑然と広がり続ける難民キャンプや、アンゴラなどの戦争で荒廃した国々で暮らしているのが現状である。

1990年に32万人ほどの子どもたちがUNHCR主

催の授業に参加した。最新の推定値では、2000年までに、参加資格のある500万人の子どものうち100万人が参加したとされる。しかしこの改善の陰に、高等教育などの難しい問題が隠れている。高等教育を受け、技能を伸ばす機

24ページへ続く



UNHCR / H.J. DAVIES

帰郷する幸運な子どももいる。ザイール（現コンゴ）国内にある難民一時滞り施設で帰国を待つルワンダの子どもたち（1997年）。

# 殺りくから逃れアメリカへ

## 途方もない経験をしたスーダン難民の子どもたちが驚きばかりの未知の国で新しい生活を始める

### パノス・モンツイス

クオル・ジョク（21歳）と仲間4人が、アフリカ東部のスーダンから地球を半周して、最近彼らを受け入れてくれた国に到着した。そしてすぐに、もの珍しい町の様子を見物に出かけた。こぎれいな郊外の住宅、品物であふれかえるスーパーマーケット、ビルがそびえ立つオフィス街、「電動階段」、そして今まで見たこともない数の車で混雑するハイウェイ。

彼らが宿舎に戻ってくると間もなく、かつてよく目にした嫌な光景に迎えられた。武器を振りかざす、見知らぬ人たちだ。玄関ドアのカギを開けられずに苦労していた若者たちを近所の人々が怪しんで、地元のバージニア州リッチモンド警察を呼んだのだ。警官らが玄関の前で動き回っていた間、スーダン人の若者たちは床に座り、事態が収まるのを待っていた。結局、誤解は解けた。

### ようこそアメリカへ

クオル・ジョクの驚くべき放浪の旅は、1987年にスーダン南部の荒涼としたサバンナから始まった。政府軍といくつものゲリラ勢力との間で何年にもわたって戦闘が続き、荒廃しきったその地域では、おびただしい数の一般市民が家を追われていた。次第に数を増し集団となった7歳から14歳の少年1万2000人が、「アフリカの角」地域の荒野を徒歩で横断し、やがてケニアにたどり着いた。その難民キャンプで何年も苦しい生活をしているうちに、この集団は「スーダンのさまよえる少年」として知られるようになった。

これに対し2000年、アメリカが、親が行方不明が死亡した子ども3600

人の受け入れを承諾した。こうして、彼らはいくつかのグループに別れ、空路アメリカの10州に到着した。これは連邦政府による未成年者の第三国定住受け入れとしては、ベトナム戦争終結後、最大規模のものであった。

が7歳の時だった。

生き延びるために木の葉や、時には土さえも食べて、何週間も歩き続けた。「一緒に旅を続けたグループが川を渡らねばならなかった時、泳げない子どもがたくさん溺死した。渦巻く水の上に



「アフリカの角」にいたスーダンの「さまよえる少年たち」。

よくても人生の大半を難民として過ごすのを運命づけられていたような若者たちには、危険と当惑に満ちた体験だった。しかし、世界中にいる他の多くの難民の子どもと異なり、この少年たちは、無限のチャンスと希望を秘めた未来が期待できるのだ。

「さまよえる少年」一人ひとりが、クオル・ジョクと同じような経験をしている。クオルの母親はスーダンのボル地域にあった村が襲撃された時に殺された。一番上の兄はその1年前の襲撃で殺害された。村から逃げ出し、途方もない集団大移動を始めたのは、彼

小さな手が突き出され、やがて水に流されていった様子は目に焼きついて忘れられない」とクオルは言う。

ようやくエチオピアに到着し一時的に安全を得たが、内戦が広がり、再びスーダンに戻らねばならなかった。彼らの放浪は続いた。あるとき、クオルは弟のエライジャと4年ぶりに再会した。「お父さんと妹は死んでしまって、村は全滅したと弟は言った。僕は打ちのめされた。怒りと絶望に見舞われたけれど、弟に会えて嬉しかった」

2人は年齢が低すぎたため、スーダン人民解放軍による徴兵を免れ、1万



2000人の少年によるケニアへの集団大移動に加わった。そして、後に保護者のいない未成年者を最も多く収容する難民キャンプとなるケニアのカクマに到着した。長い苦難の旅が終わるまでに、少年の多くは2000キロも歩いた。

ケニア北部の荒野に雑然と広がる難民キャンプでの8年間の生活は、彼らが後に直面したアメリカでの新しい生活のための理想的な準備とはならなかった。「適応のための基本的な指導を行

(2000カロリーの豆、トウモロコシ、油、サトウモロコシ)だった。1日3回、スパゲッティ、ピザ、ハンバーガー、アイスクリーム、チョコレートという高カロリーのアメリカの食事は嬉しい驚きだったが、初めのうちはほとんど全員が消化不良になった。

慣れない礼儀作法にも戸惑った。握手をしたり、女性からアドバイスや命令を受けた経験は誰にもなかった。だがアメリカ流の新しい生活習慣にすぐ慣れていった。

クオルは到着した子どもたちの中では年長であり、すぐに大工として家具工場で働きだした。週に6日働き、授業料、特に英語クラスの授業料を貯めている。スーダン人には初めのうち、食料を買うための切符の支給や健康保険などの支援がなされるが、できるだけ早く自立するよう求められた。

クオルとエライジャの兄弟は同じリッチモンドにいますが、住む所は別々になった。エライジャは少年のためのグループ・ホーム(共同生活施設)に住み、地元の高校に入った。

リッチモンドの住民は、スーダン人の行儀のよいふるまいと、英語習得と勉学への熱意に感心している。「リッチモンドの地元社会の反応は極めて良好です」とカトリック教会のボランティア調整官メイレン・ラウが言う。「あの子どもたちの話を聞くと誰もが助けたくありません。新品の衣類、靴、お金の提供からボランティア活動への参加まで、いろいろな形の寄付を受けています」

スーダンの少年たちは、思いがけなく新しい生活のチャンスを与えられた「難民の子どもに非常に特異な例」であるかもしれない。しかし、UNHCRアメリカ駐在代表ゲネ・ゲブルクリストによれば、まだ懸念すべき点があるという。

それは、もし、ひどい喧嘩に巻き込まれたり軽犯罪を犯すと、彼らの特異な背景や事情などまったく考慮しない移民法の対象となって、最悪の場合、無期限で刑務所に拘禁される事態さえ起きかねないということである。だが本誌が取材したスーダン人とアメリカの世話人たちの中でも、彼らの不安定な立場に気づいている者はいなかった。

今のところ彼らは、暖房のきいたアパート、新しいコンピューター、そしてピザのある幸運を楽しみ、満足している。スーダン南部の乾き切った平原は、リッチモンドからはるかかなたにある。



新生活の始まり エライジャ・ジョクが、アメリカ人教師とインターネットを利用している。

い、ガスレンジやシャワーの使い方、電話のかけ方、銀行口座の開き方などを教えねばなりません」とリッチモンドのカトリック教会の難民・移住民サービス地域所長キャサリン・ジャクソンは言う。

若者は生まれて初めて、難民キャンプで自分たちが建てた倒れそうな泥レンガの家とは違う、電気と水道のある家に住んでいる。8年もの長い間、彼らはいつと同じ粗食

### 白いもの

ここに来るまで、エライジャは雪について聞いたことがなかった。初めて「奇妙な」白いものが降ってくるのを見て、始めは触るのさえ怖かった。映画鑑賞やコンピューターの習得、クリスマス当日のホワイトハウス見学に到着したばかりの若者たちにとってはすべてが生まれ初めて初めての驚きだった。

未成年者の  
第三国定住受け入れとしては、  
ベトナム戦争終結後、  
最大規模のものだ。



UNICEF / R. LEMOYNE

コソボへの帰郷（1999年）

21ページより続く

会に恵まれる難民・避難民の青少年少女はごくわずかだ。

UNHCRは設立50周年を記念し、この問題を改善するための小さな一歩を踏み出し、昨年末に中等教育を資金援助する「難民教育基金」を設立した。緒方貞子高等弁務官（当時）は「教育は夢ではなく約束でなければならない」と語った。

教育の機会が子どもたちに与えられても、微妙な問題が知らぬ間に起きていることも多い。

「4歳のコウ・ヤ君と6歳のシア・ヤちゃんが溝に落ちている『ボール』に気がついたのは水牛を牧草地に連れて行こうとしている時だった。シア・ヤちゃんはボールを弟に投げた。ボール爆弾が炸裂してふたりは死に、自転車で通りかかった人まで負傷した」

カンボジアで起きた事件

バングラデシュでは子ども難民に高等教育用の奨学金が与えられた時、あからさまな反感が、国の首都でも感じられた。現地の子もでさえ、このような機会に恵まれていなかったから

だ。イスラムの戒律が厳しく、少女が正規に学校に通う伝統がほとんどない国では、料理油を余分に配るなどの配慮をして、親に娘を学校に行かせるよう奨励した。

学校のカリキュラムも、細かく監視する必要がある。グラサ・マシエル氏が「憎悪が流れ出る場所」と名づけたように、教材で、隣人やかつての敵に関しての有害な固定観念をいつまでも伝える場所にしてはならない（p.8参照）

マシエル氏は今後10年間の徹底した変革を提唱している。子どもたちへの援助を見直し、食べ物や飲み物だけでなく、教育・スポーツ用品も含めなければならない。「援助物資にサッカーボールやテニスボールを1000個入れるのに大した費用はかかりませんが、子どもたちにとっては非常に大きな意味があるのです」とマシエル氏は言う。

世界中、特に最も貧しい国々で、子どもたちに平等に援助が行き渡るようにしなければならない。国際協定を無視しながら罰を受けない国々には、政

治的不名誉といった無形の制裁よりもはるかに高い具体的な代償を払わせるようにしなければならない、とマシエル氏は続けた。

1951年の難民条約に子どもの保護に関する選択議定書をつけてその効力を高めようという構想が議論されてきた国際法分野で、なんらかの変化が見られるかもしれない。

各機関は、子どもの健康、教育その他のプログラムの構想への子どもたちの参加を奨励すると語っている。

UNHCR子ども部門の

リナーは、各人道機関が別々に行動することによる浪費、重複、不経済な競合の排除では進展があったが、より緊密な調整と協力によって、効率をさらに上げることが可能だと語った。

「私たちが未来なら、そしてその私たちが死んでゆくなら、未来などない」 エイズの影響を語るザンビアの月刊紙。

新しいミレニアムの最終目標はかなり明確なようだ。すなわち、会議を減らして実際に子どもを助ける活動を増やすことである。

「承認した決議の半分だけでも実施していたら、今日、もっとよい状態になっていたでしょう」とマシエル氏は本誌に語った。「討論を減らし、子どもたちを助けるための行動に専念する時が来ているのです」



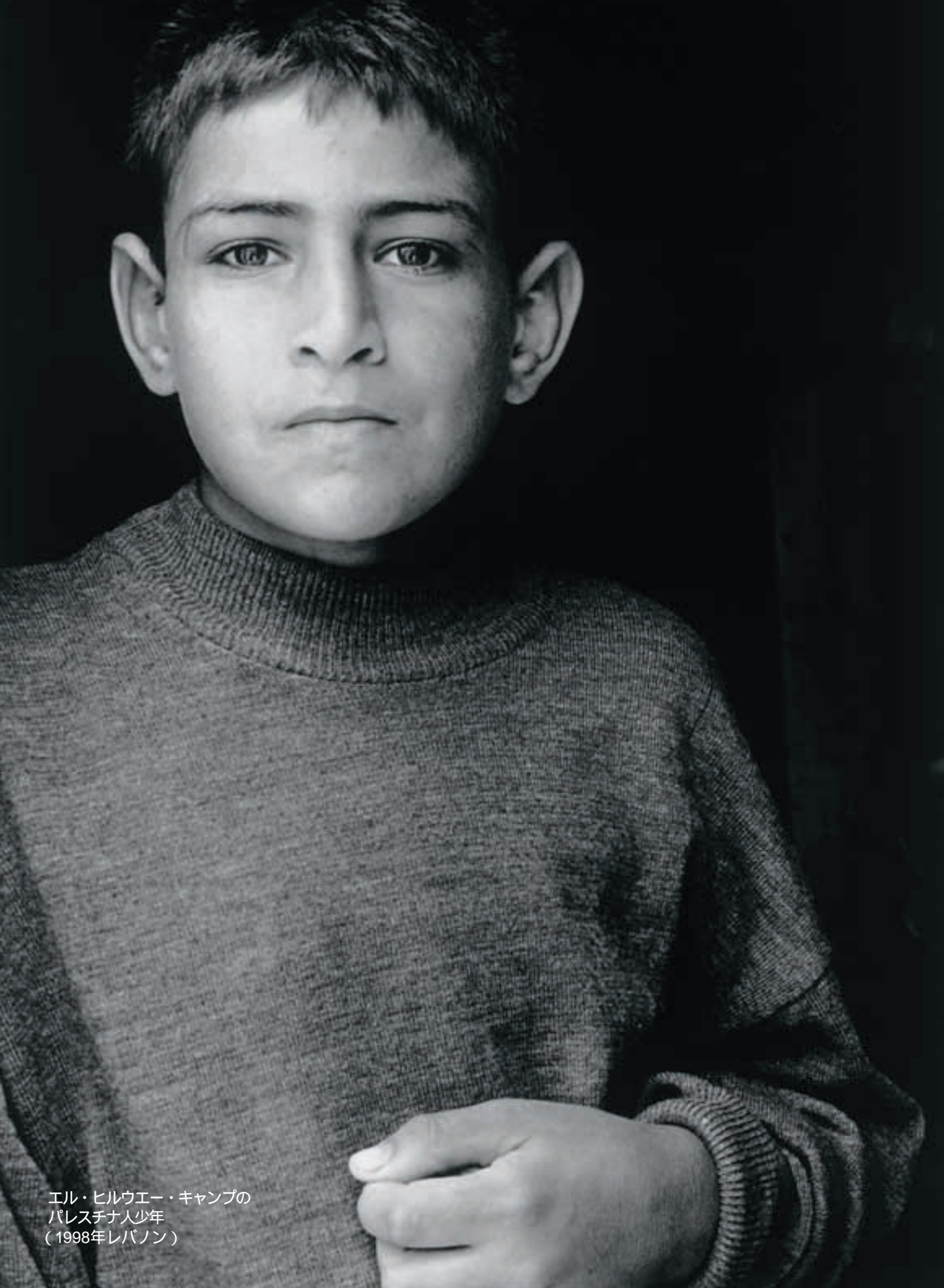


# 難民の 子どもたち

セバスチャン・  
サルガドによる  
フォトエッセイ

ツチ系難民  
(1995年)





エル・ヒルウエー・キャンプの  
パレスチナ人少年  
(1998年レバノン)





インドネシアの抑留センターでの  
カンボジアの少女  
(1995年)





クルド人の少女  
(1997年イラク)





ルワンダ人の少年  
(1997年ザイール)





Kosovo refugees  
 (1999 Albania)





タジク人の難民  
(1996年アフガニスタン)



